

定時制高校に通う生徒の学校適応と性格特性との関連

The Relation between the Adaptation of the students to a Part-Time High School and Their Personal Characteristics.

金子 恵美子
(こども学科 講師)

伊藤 美奈子
(奈良女子大学 教授)

要旨 本研究では、A定時制高等学校の生徒338名への質問紙調査から、定時制高校に通う生徒の学校適応と性格特性(「内向性」「甘え・耐性欠如」との関連について検討を行った。(1)中学校、高校での登校状況と性格特性には関連が見られ、登校状況が不調な生徒の方が内向性が高く、内向性の高さが登校を継続する上での困難となりうることを示唆された。(2)学校享受感、学校生活適応感「友人関係」「特別活動への態度」「進路意識」「教師との関係」、自尊感情「他者との関係性志向」「自己主張・自己決定」は内向性と関連し、学校生活適応感「特別活動への態度」「学習意欲」は甘え・耐性欠如と関連することが示唆された。内向性の高い生徒には小集団での活動の経験や活動に負担なく関われるための丁寧な導入が重要であり、甘え・耐性欠如が高い生徒は学習や学校行事へのモチベーションを高める細やかな働きかけが重要であると考えられる。(3)学校適応を支える学校環境として、教師の支援・対応の充実は生徒の性格特性によらず重要であるが、内向性、甘え・耐性欠如の高低により、生徒の学校享受感や自尊感情の高さと関連する学校環境は異なり、内向性が高く甘え・耐性欠如の低い生徒には学校の秩序が保たれていることが、内向性が低く甘え・耐性欠如が高い生徒には自由な雰囲気が必要であることが示唆された。

【キーワード：定時制高校 性格特性 学校適応 自尊感情 学校環境】

I. はじめに

定時制高校は、従来、就業等のために全日制高校に進学できない青年に教育の機会を提供する場であったが、近年では小中学校における不登校経験者を柔軟に受け入れ、対応する場として注目され、不登校経験者の進路先の候補として考えられることも多い。文部科学省(2016)によると、小中学校における不登校児童生徒は平成20～24年度にかけては減少傾向であったが、平成25～27年度にかけては再び増加傾向となり、平成27年度には約12万6,000人が不登校状態となっている。不登校の問題は、依然として小中学校での重大な課題であり、その対応が小中学校だけでなく高校においても求められるようになってきている。そうした中で、定時制高校は小中学校での不登校経験者を受け入れるとともに、全日制高校から進路変更してきた者や自分のペースで学びたいといった多様なニーズを持つ者を受け入れており(文部科学省, 2013)、それぞれの生徒に合わせた対応がより求められている。

それぞれの生徒に合わせた対応を考えるには、生徒の持つ特徴を見極めることが重要であると思われ

る。不登校の類型化を試みる多くの研究の中で、不登校児童生徒の抱える課題や性格特性について精神医学的な観点、心理学的な観点などから検討されており、不登校児童生徒の適応や予後に関連する要因の検討が行われている。特に、東京都立多摩教育研究所(1992)は大量の事例を分析し、非社会性の問題に加えて耐性のなさの問題を抱える事例の多いことを指摘し、さらに、子どもの性格傾向に関する治療者のイメージ調査から「非社会性」と「耐性欠如」の2軸を見出し、これを基準として不登校事例を4群に分類し、対応に相違があることを見出している(東京都立多摩教育研究所, 1994)。それらの研究をもとにして、内向性と耐性欠如の側面から不登校の性格特性をとらえる尺度も作成されている(飯田, 2000)。生徒の学校適応を支える要因について考えるためには生徒の特徴の1つである性格特性を考慮することも重要であると考えられ、特に定時制高校においては小中学校において不登校を経験した生徒や全日制高校において不適応となり転編入してきた生徒も多く見られることから、生徒の特徴を捉える上で不登校の性格特性の指標が役

立つものと考えられる。

また、本研究では生徒の学校適応を支える要因として、学校環境に着目する。不登校に関連する要因として、これまで学校要因に関する研究も行われ、教員数や生徒数など学校の規模との関連について研究したもの（保坂，1997a）や友人関係や教師との関係、学習への志向の強さなどとの関連について研究したもの（保坂，1997b）などがある。生徒の学校適応を支える要因として学校の環境は重要であり、学校の規模といった物理的な面だけでなく、友人関係や教師との関係などの人間関係面、学校の指導体制や学校風土といった学校の持つ雰囲気なども関連してくるものと思われる。

そこで、本研究では、A定時制高校に通う生徒を対象として質問紙調査を行い、生徒の学校適応と性格特性との関連について明らかにし、生徒の性格特性に合わせた支援のあり方について検討することを目的とする。生徒の適応の指標として、登校状況、高校中退の意識、学校享受感、学校生活適応感、自尊感情に着目し、それらが生徒の性格特性とどのように関連しているのか、また生徒の性格特性によってどのような学校環境が生徒の適応を支える要因となっているのかについて検討を行う。

II. 方法

1. 調査方法 質問紙調査
2. 調査時期 平成21年12月～平成22年1月
3. 調査対象 都内A定時制高校生357名。そのうち回答に著しく不備のある者および25歳以上のものを今回の分析からは除外し、分析対象は338名（1年99名，2年102名，3年137名；男子146名，女子192名）となった。
4. 調査内容
 - 1) フェイスシート（学年，年齢，性別）
 - 2) 学校享受感尺度 小林・仲田（1997）の学校享受感尺度10項目を使用した。各項目について、「よくあてはまる（5点）」～「まったくあてはまらない（1点）」の5件法で評定を求めた。
 - 3) 学校生活適応感尺度 内藤・浅川・高瀬・古川・小泉（1986）の学校生活適応感尺度6因子36項目より「規則への態度」因子を除く5因子（「学習意欲」「友人関係」「進路意識」「教師との関係」「特別活動への態度」）30項目を使用した。各項目について、「とてもよくあて

はまる（5点）」～「まったくあてはまらない（1点）」の5件法で評定を求めた。

- 4) 授業理解度 片岡（1993）の授業内容に関する項目を使用し、「よくわかる（5点）」～「ほとんどわからない（1点）」の5件法で評定を求めた。
- 5) 東京都版自尊感情尺度 伊藤（2010）の児童・生徒の自尊感情に関する22項目を使用した。各項目について、「よくあてはまる（4点）」～「まったくあてはまらない（1点）」の4件法で評定を求めた。
- 6) 学校環境認知 Trickett & Moos（1995）の日本語訳版（伊藤・松井，1996）より先行研究（根本，1989；伊藤ら，1996）の結果を参考に選定した16項目と高田（1999）を参考に作成した4項目の計20項目を使用した。「よくあてはまる（4点）」～「まったくあてはまらない（1点）」の4件法で評定を求めた。
- 7) 不登校の性格特性についてのSD法尺度 飯田（2000）が東京都立多摩教育研究所（1994）を参考に作成した性格特性に関する15対のSD法尺度を使用し、4件法で評定を求めた。
- 8) 中学校での登校状況 片岡（1993）を参考に作成し、「ほとんど休まなかった」「月に1～2日」「週に1～2日」「週に3日以上」「ほとんど休んだ」の5段階で評定を求めた。
- 9) 高校での登校状況 片岡（1993）を参考に、「ほとんど休まない」「月に1～2日」「週に1～2日」「週に3～4日」「週に5～6日」欠席の5段階で評定を求めた。
- 10) 高校中退の意識 高校をやめようと思ったことがあるかどうかについて、「よくある」「ときどきある」「まったくない」からあてはまるもの1つの選択を求めた。

III. 結果

1. 因子分析
 - 1) 各尺度の因子分析（最尤法・プロマックス回転）

学校享受感は、先行研究（小林ら，1997）と同様に1因子性が確認された。

学校生活適応感は、固有値1.0以上の基準、固有値の減退率から因子を抽出し、先行研究（内藤ら，1986）と同様に5因子が抽出された。先行研究に則って、第1因子「友人関係」、第2因子「特別活

動への態度」, 第3因子「進路意識」, 第4因子「教師との関係」, 第5因子「学習意欲」と命名した。

自尊感情は, 因子構造が先行研究 (伊藤, 2010) とは一致しなかった。そこで, より内的整合性の高い先行研究の因子構造を採用し, 第1因子「自己評価・自己受容」, 第2因子「他者との関係性志向」, 第3因子「自己主張・自己決定」とした。

学校環境認知について, 固有値 1.0以上の基準, 固有値の減退率から先行研究 (金子・伊藤, 2015) と同様に5因子を抽出した。第1因子は「先生は, 生徒とよく話してくれる」「先生は気持ちをわかってくれている」などの項目から構成される「教師の支援・対応の充実」, 第2因子は「この学校の生徒は, 学校の活動に一生懸命取り組んでいる」「この学校の生徒は話し合いや活動に自分から参加する」などの項目から構成される「学校活動の活発さ」, 第3因子は「この学校は自由である」「先生はあまり厳しくない」などの項目から構成される「自由さ」, 第4因子は「この学校は静かである」「この学校の生徒は, 授業中だいたい静かにしている」の項目から構成される「秩序の保持」, 第5因子は「この学校の生徒は, 友達が勉強しているかしていないかをあまり気にしない」「友達の間で, 勉強や成績のことはあまり話題にならない」の項目から構成される「学習での競争」と命名した。

性格特性については, 先行研究 (飯田, 2000) では2因子を想定して作成していることから, 本研究でも2因子を想定して因子分析を行った。因子負荷量が.350に満たない項目を削除し再度因子分析を行った結果, 第1因子は「消極的であるー積極的である」「内気であるー内気でない」などの項目から構成される「内向性」, 第2因子は「幼稚であるー大人びている」「あまえんぼうであるー自立している」などの項目から構成される「甘え・耐性欠如」

と命名した。

2) 合成変数構成と内的整合性

因子分析の結果をもとに, 因子ごとに項目得点を合計し項目数で除した尺度得点を使用する。また, 自尊感情尺度は, すべての項目得点を合計し項目数で除した得点を自尊感情得点として使用する。信頼性を検討するため α 係数を求めたところ, 学校享受感 (.91), 学校生活適応感:「友人関係」因子 (.88), 「特別活動への態度」(.93), 「進路意識」因子 (.90), 「教師との関係」因子 (.90), 「学習意欲」因子 (.89), 自尊感情:「自己評価・自己受容」因子 (.82), 「他者との関係性志向」因子 (.77), 「自己主張・自己決定」因子 (.78), 学校環境認知:「教師の支援・対応の充実」因子 (.79), 「学校活動の活発さ」因子 (.58), 「自由さ」因子 (.64), 「秩序の保持」因子 (.67), 「学習での競争」因子 (.67), 性格特性:「内向性」因子 (.80), 「甘え・耐性欠如」因子 (.64)であった。

2. 性格特性の性差・学年差

性格特性 (「内向性」「甘え・耐性欠如」) について, 学年, 性別による差を検討したところ (Table1, Table2), 学年による差は見られなかったが性別による差は見られ, 「甘え・耐性欠如」について女子のほうが高い得点を示した。

3. 性格特性と中学校登校状況, 高校登校状況, 高校中退の意識との関連

性格特性が中学校での登校状況, 高校での登校状況, そして高校中退の意識とどのように関連しているのかについて検討を行った。

中学校での登校状況については, 欠席をほぼしていない状態 (「ほとんど休まなかった」「月に1~2日くらい休んだ」) を「中学登校良好」, 週1回以上

Table1 学年による性格特性得点の平均と分散分析結果

	1年	2年	3年	F値
内向性	2.67 (0.60)	2.67 (0.66)	2.77 (0.61)	n.s.
甘え・耐性欠如	2.53 (0.65)	2.46 (0.59)	2.60 (0.65)	n.s.

Table2 性別による性格特性得点についての t 検定

	男子	女子	t値
内向性	2.72 (0.61)	2.70 (0.63)	n.s.
甘え・耐性欠如	2.40 (0.60)	2.64 (0.63)	3.46**

**p<.01

Table3 中学登校状況による性格特性についてのt検定

	中学校登校良好群	中学校登校不良群	t値
内向性	2.66 (0.60)	2.83 (0.65)	2.32*
甘え・耐性欠如	2.50 (0.65)	2.61 (0.61)	n.s.

*p<.05

Table4 高校登校状況による性格特性についてのt検定

	高校登校良好群	高校登校不良群	t値
内向性	2.67 (0.62)	2.90 (0.61)	2.59*
甘え・耐性欠如	2.52 (0.63)	2.64 (0.66)	n.s.

*p<.05

Table5 高校中退の意識による性格特性得点の平均と分散分析結果

	よくある	ときどきある	まったくない	F値
内向性	2.79 (0.63)	2.72 (0.55)	2.66 (0.66)	n.s.
耐性欠如・甘え	2.70 (0.64)	2.53 (0.63)	2.50 (0.63)	n.s.

欠席しており、不登校傾向または不登校であったと考えられる状態（「週に1～2日くらい休んだ」「週に3日以上休んだ」「ほとんど休んだ」）を「中学登校不良」と分類した。それぞれの群ごとに性格特性（「内向性」「甘え・耐性欠如」）の平均得点を算出しt検定を行ったところ（Table3）、「内向性」については中学登校状況による差が見られ、中学校で登校状況が不調だった生徒のほうが良好だった生徒に比べて得点が高かった。「甘え・耐性欠如」については差が見られなかった。

次に、高校での登校状況についても、欠席をほぼしていない状態（「ほとんど休まない」「月に1～2回」）を「高校登校良好」、週1回以上欠席しており、不登校傾向にあると考えられる状態（「週に1～2日」「週に3～4日」「週に5～6日」）を「高校登校不良」と分類した。それぞれの群ごとに性格特性（「内向性」「甘え・耐性欠如」）の平均得点を算出しt検定を行ったところ（Table4）、「内向性」については高校登校状況による差が見られ、高校での登校状況が不調である生徒のほうが良好である生徒に比べて得点が高かった。「甘え・耐性欠如」については差が見られなかった。

次に、高校中退の意識については、高校をやめようと思うことが「よくある」「ときどきある」「まったくない」生徒ごとにそれぞれ性格特性（「内向性」「甘え・耐性欠如」）の平均得点を算出し、1要因の分散分析を行ったところ（Table5）、「内向性」「甘え・耐性欠如」のいずれについても高校中退の意識によ

る差は見られなかった。

4. 性格特性と学校享受感、学校生活適応感、自尊感情との関連

次に、性格特性（「内向性」「甘え・耐性欠如」）と学校享受感、学校生活適応感、自尊感情との関連について検討を行うため、性格特性の「内向性」と「甘え・耐性欠如」を2要因とする分散分析を行った（Table6）。「内向性」「甘え・耐性欠如」について、それぞれの平均得点より高いものを高群、平均得点より低いものを低群とした。

学校享受感、学校生活適応感5因子、自尊感情3因子のいずれについても交互作用は見られなかった。学校生活適応感の「特別活動への態度」のみ「内向性」「甘え・耐性欠如」のいずれの主効果も有意であり、内向性低群のほうが内向性高群に比べて得点が高く、また甘え・耐性欠如低群のほうが甘え・耐性欠如高群に比べて得点が高かった。学校享受感、学校生活適応感の「友人関係」「進路意識」「教師との関係」、自尊感情の「他者との関係性志向」「自己主張・自己決定」については「内向性」による主効果のみ有意で、内向性低群のほうが内向性高群に比べて得点が高かった。学校生活適応感の「学習意欲」は「甘え・耐性欠如」による主効果のみ有意で、甘え・耐性欠如低群のほうが甘え・耐性欠如高群に比べて得点が高かった。自尊感情の「自己評価・自己受容」はいずれの主効果も見られなかった。

Table6 性格特性「内向性」「甘え・耐性欠如」による学校享受感, 学校適応感, 自尊感情得点の平均と分散分析結果

	内向性高群		内向性低群		主効果			
	甘え高群	甘え低群	甘え高群	甘え低群	内向性	甘え・耐性欠如	交互作用	
学校享受感	2.70 (0.88)	2.81 (0.85)	3.11 (1.04)	3.05 (0.86)	9.98**	n.s.	n.s.	
学校適応感	友人関係	2.77 (0.96)	2.94 (0.90)	3.58 (0.80)	3.40 (0.83)	39.78**	n.s.	n.s.
	特別活動	2.14 (1.00)	2.64 (1.04)	2.82 (1.26)	3.01 (1.06)	17.91**	7.61**	n.s.
	進路意識	2.88 (1.08)	3.09 (1.10)	3.34 (1.18)	3.39 (1.05)	9.03**	n.s.	n.s.
	教師関係	2.70 (1.02)	2.77 (1.05)	2.92 (1.07)	3.09 (0.87)	5.57*	n.s.	n.s.
	学習意欲	2.09 (0.85)	2.42 (0.78)	2.23 (1.07)	2.67 (0.81)	n.s.	15.05**	n.s.
自尊感情	自己評価・自己受容	2.48 (0.44)	2.54 (0.28)	2.57 (0.40)	2.61 (0.33)	n.s.	n.s.	n.s.
	他者との関係性志向	2.62 (0.57)	2.82 (0.54)	3.00 (0.51)	3.00 (0.47)	21.78**	n.s.	n.s.
	自己主張・自己決定	2.53 (0.58)	2.67 (0.47)	2.92 (0.56)	3.02 (0.51)	37.10**	n.s.	n.s.

**p<.01 *p<.05

5. 性格特性による4群における学校享受感, 自尊感情と授業理解度, 学校環境認知5因子との相関

性格特性の「内向性」「甘え・耐性欠如」の高低を組み合わせて, 内向性高・甘え高群 (82名), 内向性高・甘え低群 (70名), 内向性低・甘え高群 (61名), 内向性低・甘え低群 (105名) に分類した。群ごとに学校享受感, 自尊感情と授業理解度, 学校環境認知5因子との相関係数を算出し, まとめたものがTable7である。

いずれに群においても, 学校享受感と学校環境認知の「教師の支援・対応の充実」との間に中程度の正の相関が見られた。また, 内向性低・甘え高群を除く3群では, 学校享受感と授業理解度との間に弱い正の相関が見られた。内向性低・甘え高群, 内

向性低・甘え低群では, 学校享受感と「自由さ」との間に弱い正の相関が見られ, 内向性高・甘え高群では, 学校享受感と「学校活動の活発さ」との間に弱い正の相関が見られた。

一方, 自尊感情についても, いずれの群においても学校環境認知の「教師の支援・対応の充実」との間に中程度から弱い正の相関が見られた。また, 内向性高・甘え高群, 内向性低・甘え高群では, 自尊感情と授業理解度との間に弱い正の相関が見られた。内向性低・甘え高群では, 自尊感情と「自由さ」との間に弱い正の相関が, 「学習での競争」との間に中程度の負の相関が見られた。内向性高・甘え低群では, 自尊感情と「秩序の保持」との間に弱い正の相関が見られた。

Table7 学校享受感, 自尊感情と授業理解度, 学校環境認知5因子との相関係数

		授業理解度	学校環境の認知				
			教師の支援・対応の充実	学校活動の活発さ	自由さ	秩序の保持	学習での競争
学校享受感	内向性高・甘え高群	.245*	.541**	.328**	.150	.202	.181
	内向性高・甘え低群	.361**	.410**	.223	.162	.195	-.055
	内向性低・甘え高群	.081	.624**	.211	.326*	-.163	.078
	内向性低・甘え低群	.258*	.470**	.024	.212*	.076	.155
自尊感情	内向性高・甘え高群	.306**	.404**	.213	.120	.207	.022
	内向性高・甘え低群	.155	.261*	.021	.134	.340**	.006
	内向性低・甘え高群	.273*	.284*	-.064	.311*	.096	-.410**
	内向性低・甘え低群	.109	.247*	.120	.016	.132	-.082

**p<.01 *p<.05

IV. 考察

本研究では、定時制高校に通う生徒の学校適応と性格特性との関連について検討を行った。

まず、性格特性を「内向性」「甘え・耐性欠如」の2側面から捉え、学年、性別による相違を検討したところ、学年による差は見られず、「甘え・耐性欠如」の側面について性別による差が見られた。女子のほうが男子に比べ「甘え・耐性欠如」の得点が高く、自分自身の性格について幼い、甘えていると捉えていることが示唆された。

次に、性格特性の2側面が学校適応とどのように関連しているのかを検討するため、中学校での登校状況、高校での登校状況、高校中退の意識に着目して検討を行った。中学校での登校状況、高校での登校状況のいずれについても、「内向性」については登校状況による差が見られ、登校状況が不調の生徒のほうが内向性が高いことが示唆された。一方、「内向性」「甘え・耐性欠如」のいずれについても高校をやめたいという中退の意識による差は見られなかった。このことから、性格特性の「内向性」「甘え・耐性欠如」の高低は高校をやめたいという意識の強さとは関連しないが、「内向性」の高さは生徒の登校状況と関連し、登校を継続する上での困難となりうる可能性があることが推測された。不登校に関する予後の研究(小林・鈴木, 1990; 小林・田中・神村, 1995)においても、対人関係の促進や神経過敏傾向の減少などが登校行動の改善のための要因であることが指摘されており、消極性や緊張などを強く感じていると考えられる内向性の高い生徒については緊張を和らげ、積極的に活動できるように援助していくことが登校状況の改善には重要であると考えられる。

さらに、性格特性の2側面が生徒の意識とどのように関連しているのかを検討するため、生徒の意識として学校享受感、学校生活適応感、自尊感情に着目して検討を行った。学校享受感、学校生活適応感の「友人関係」「特別活動への態度」「進路意識」「教師との関係」、自尊感情の「他者との関係性志向」「自己主張・自己決定」は、性格特性の「内向性」の側面と関連が見られることが示唆された。内向性が高い生徒は、内気さや消極性、自信のなさ、緊張などを強く感じている生徒であると考えられ、そのために学校を楽しみと感ずることや、友人や教師との人間関係、クラブや行事等の活動や進路面、また自己

主張することなどに積極的になることが難しい傾向があるのではないかと推測される。そのため、学校における活動により負担なく積極的に関わりやすくなるための段階的な働きかけとして、構成的グループエンカウンターやピア・サポート活動の際に行われるウォーミングアップのような導入を丁寧に行っていくことや、小集団での活動での成功体験を積み重ねていくことも重要であると思われる。一方で、学校生活適応感の「特別活動への態度」「学習意欲」は、「甘え・耐性欠如」の側面と関連が見られることが示唆された。幼さや甘えの側面を強く感じている生徒は、クラブ活動や学校行事への積極性や学習への意欲を持ちにくい状況にあると推測される。甘え・耐性欠如の側面を強く感じている生徒に対しては、習熟度別の学習指導でモチベーションを高めたり、クラブ活動や学校行事への積極的な参加につながる声かけをするなど、特に学習面やクラブ活動、学校行事などにおいて細やかな働きかけが必要であると思われる。

次に、性格特性の「内向性」「甘え・耐性欠如」の2側面の組み合わせから、「内向性」「甘え・耐性欠如」の側面をともに高く持っている群、「内向性」の側面のみ高く持っている群、「甘え・耐性欠如」の側面のみ高く持っている群、「内向性」「甘え・耐性欠如」の側面のいずれも低い群の4群に分類し、各群の生徒の学校享受感、自尊感情と関連する要因として授業理解度と学校環境に着目して検討を行った。学校環境としての「教師の支援・対応の充実」は、生徒の「内向性」「甘え・耐性欠如」の高低にかかわらず、いずれの群の生徒の学校享受感や自尊感情とも関連していることが示唆された。また、各群の特徴としては、「内向性」「甘え・耐性欠如」の側面をともに高く持っている群では、学校環境としての「学校活動の活発さ」が高いほど学校享受感も高いという関連があることが示唆された。また、「内向性」の側面のみ高く持っている群では、学校環境としての「秩序の保持」が高いほど自尊感情が高いという関連があること、「甘え・耐性欠如」の側面のみ高く持っている群では、学校環境としての「自由さ」が高いほど学校享受感、自尊感情が高く、学校環境としての「学習での競争」が高いほど自尊感情が低いという関連があること、「内向性」「甘え・耐性欠如」の側面のいずれも低い群では、学校環境として「自由さ」が高いほど学校享受感も高いという関連があ

ることが示唆された。性格特性によらず、定時制高校の生徒にとっては教師からの支援が充実していることが学校における適応や自尊感情において重要であると考えられる。また、特に甘えの側面が高く内向性の低い生徒にとっては、学校が自由な雰囲気であることが学校を楽しく感じることや自尊感情の高さにつながり、学習の厳しさが自尊感情の低さと関連すること、内向性の側面が高く甘えの低い生徒にとっては学校の秩序が保たれていることが自尊感情の高さと関連することが示唆された。高田(1999)は、定時制高校の学校の雰囲気について、生徒の中にも「自由」「のんびり」と肯定する意見がある一方で、「自由」が「わがまま」になることへの批判やゆるやかで自由な枠ゆえの問題を指摘する意見などアンビバレントな意見が見られることを指摘している。本研究では、生徒の特徴として、性格特性(「内向性」「甘え・耐性欠如」)の2側面に着目したが、その高低によっても自由さを心地よく感じる生徒と秩序が保たれていることを心地よく感じる生徒がいることがうかがえ、それぞれの生徒に合わせた柔軟な対応が重要であると考えられる。また、授業理解度が高いことは「内向性」の側面が高い群と「甘え・耐性欠如」の側面が低い群にとっては学校を楽しんでいることと関連しているが、「甘え・耐性欠如」の側面が高い群にとっては自尊感情の高さと関連することが示唆された。内向性の側面が高い生徒と甘えの側面が低い生徒にとっては、授業理解度が高いことが学校が楽しいという感情と関連することから生徒の授業理解度を高めることは重要であると考えられるし、甘えの側面が高い生徒は甘えの側面が低い生徒に比べ学習意欲が低いことが示唆されているが、授業理解度が高いことが自尊感情を高めることと関連することが明らかになり、甘えの側面が高い生徒にとっても学習意欲を高めるように働きかけ、授業理解度を高めていくことが重要であると考えられる。

生徒の持つ性格特性(「内向性」「甘え・耐性欠如」)は登校状況や学校享受感、学校生活適応感、自尊感情の高さとそれぞれ関連が見られ、また学校享受感や自尊感情と関連する学校環境も性格特性によって異なることが明らかになった。生徒の学校適応を高めていくためには、生徒の性格特性に合わせた働きかけを行っていくことが重要であるといえる。

文献

- 保坂亨 1997a 不登校の学校要因Ⅰ—不登校の出現率と学校の客観属性— 臨床心理学研究, 34, 2—10.
- 保坂亨 1997b 不登校の学校要因Ⅱ—不登校の多い学校と少ない学校の比較— 臨床心理学研究, 35, 30—39.
- 飯田頼子 2000 メンタルフレンド活動による子どもの変化とメンタルフレンドの意識—子ども・メンタルフレンド・職員の三者の相互関係に着目して— お茶の水女子大学生生活科学部平成11年度卒業論文.
- 伊藤垂矢子・松井仁 1996 学級風土研究の経緯と方法 北海道大学教育学部紀要, 72, 47—71.
- 伊藤美奈子 2010 「自尊感情や自己肯定感に関する研究」報告書 慶應義塾大学・東京都教育委員会(東京都教職員研修センター).
- 金子恵美子・伊藤美奈子 2015 A定時制高校生の学校享受感, 登校を規定する要因の検討 奈良女子大学臨床心理相談センター紀要, 15—22.
- 片岡栄美 1993 学校世界とスティグマ—定時制高校における社会的サポートと学校生活への意味付与— 関東学院大学人文科学研究所報, 17, 51—93.
- 小林正幸・仲田洋子 1997 学校享受感に及ぼす教師の指導の影響に関する研究—カウンセリング研究, 30, 207—215.
- 小林正幸・鈴木聡志 1990 半記述的チェックリスト法および多変量解析法による思春期登校拒否事例に関する研究(1)—改善の程度に及ぼす要因の検討— カウンセリング研究, 23, 119—132.
- 小林正幸・田中陽子・神村栄一 1995 不登校事例の改善に関する研究—登校行動改善の規定要因— カウンセリング研究, 28, 131—142.
- 文部科学省 2013 定時制・通信制課程について 高等学校教育部会(第19回)配布資料(資料2—1)
- 文部科学省 2016 平成27年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」に

ついて

- 内藤勇次・浅川潔司・高瀬克義・古川雅文・小泉
令三 1986 高校生用学校環境適応感尺度作成
の試み 兵庫教育大学研究紀要, 7, 135-145.
- 根本橘夫 1989 学級集団における社会心理学的
風土の多次元的研究—問題点と主要な知見—
千葉大学教育学部研究紀要, 37, 39-54.
- 高田晃治 1999 高等学校中途退学者のアイデン
ティティ発達に関する一考察 心理臨床学研究,
16, 604-610.
- 東京都立多摩教育研究所 1992 不登校事例の再
検討〔I〕—教育相談室の実態から— 東京都
立多摩教育研究所教育相談研究室紀要, 1-66.
- 東京都立多摩教育研究所 1994 不登校事例の再
検討〔II〕—相談・対応をめぐって— 東京都
立多摩教育研究所教育相談研究室紀要, 1-68.